

## 新刊紹介

### 星野妙子編『ラテンアメリカ新一次産品輸出経済論—構造と戦略』

星野妙子



アジア経済研究所  
2007年

最近、日常生活のなかでラテンアメリカの一次産品を目にすることが多くなった。ラテンアメリカの一次産品というとまず思いつくのは、ブラジルのコーヒーや中米のバナナに代表される伝統的の一次産品であろう。しかし近ごろはこれらに加えて、チリのサーモンやワイン、メキシコのアボガドやカボチャ、ペルーのアスパラガスなど、これまでにない新し

い産品が、ごく普通にスーパーの棚に並ぶようになった。一方、あまり目立たないところでもラテンアメリカの一次産品の浸透は進んでいる。例えば鶏肉である。ひとつ外食チェーンの焼き鳥といえはタイ産が主流であった。しかしアジアで鳥インフルエンザが発生して以降、ブラジル産鶏肉が市場を席巻していることは余り知られていない。

一方、新聞でもラテンアメリカの一次産品に関する記事を目にすることが多くなった。特に目立つのがエネルギー・鉱物資源関連の記事である。中国の経済成長、それに伴うエネルギー・鉱物資源の需要拡大により、これら産品の価格が高騰した。そのためラテンアメリカのエネルギー産業・鉱業は活況を呈している。

さらに、需給の均衡が供給側に有利に傾いたことから、ラテンアメリカでは一九七〇年代以来の資源ナショナリズムの昂揚が見られる。日本はエネルギー・鉱物資源の供給を大きく海外に依存するために、重要な供給地域であるラテンアメリカの動向に無関心ではいられない。

一九八〇年代初頭まで、輸入代替工業化政策のもとで資源を集中的に投下して成長する工業部門の影に隠れ、一次産品輸出産業は活力を失っていた。それが一九八〇年代から九〇年代の新自由主義経済改革を経て、かつての活力を取り戻したように見受けられる。活性化に並行して、一次産品輸出産業の構造や担い手にど

のような変化が生じているのか。それがラテンアメリカ経済の発展にとってどのような意味を持つのか。本書はこのような問題関心のもとに研究所が実施した研究の最終成果である。

本書で特に焦点を当てるのは、ラテンアメリカの一次産品輸出拡大の背景にある、市場の変容と担い手の再編である。一九九〇年代以降、世界においては貿易自由化の進展、中国をはじめとする新興諸国の経済成長、先進諸国における消費者の嗜好の多様化などにより、一次産品市場は大きく変容をとげた。一方、このような市場の変容と、同時期にラテンアメリカで進展した新自由主義経済改革によって、一次産品輸出産業の産業組織と担い手の再編が進んだ。再編後の一次産品輸出産業は、高度な技術力と経営能力を備えた担い手により占められるようになっていく。本書ではこのような市場の変容と担い手の再編の特徴を、多様な一次産品を取り上げ、それぞれの一次産品産業の変化の過程を実証的に分析することで明らかにしている。さらにそれによって、一次産品輸出産業の持続的成長の可能性と限界、ならびに望ましい成長のあり方とそれに向けての政策的課題を探ることを試みている。

本書で分析対象として取り上げたのは、ブラジルの大豆と鶏、メキシコの豚、ペルーのアスパラガス、チリの林産品、ベネズエラの石油をし

てエクアドルのバナナである。それぞれの国で近年輸出が伸びている非伝統的の一次産品、あるいは近年注目される変化が見られる伝統的の一次産品が選択された。

本書のひとつの成果は、多様な一次産品産業に共通する産業組織の変化として、垂直的構造の形成を明らかにしていることである。すなわち一次産品産業は、農林畜水産業の場合は一次産品と投入材の生産、その加工、流通などの部門から、鉱業・石油産業の場合は、探鉱、採鉱、精製、加工、流通などの部門から形成されている。近年の再編の過程で、それらの部門が固定的な取引関係あるいは資本関係で結ばれた垂直的構造の形成が進んだ。そのような構造が形成される要因としては、納期、品質、価格をめぐる展開する市場競争に対応するため、あるいは多様化・高度化する需要に対応するために、部門間の調整の必要性が増したことがあげられる。また、一次産品の生産は自然に大きく左右され、自然相手であることから生じる不安定性を常に抱えている。各部門で進化した技術革新が、本来不安定である一次産品生産の各工程のシステムの管理を可能にし、部門間の調整を可能にしたといえる。一次産品の生産・流通システムが工業製品のそれに近づきつつあることを、本書でとりあげた様々な事例は明らかにしている。

(ほしの たえこ／アジア経済研究所地域研究センター)